

2013年度

博士学位申請論文
(要 約)

指導教員	田辺 正美 教授
------	----------

論文 題目	和 文	視覚スキーマを用いた意味拡張 動機づけの分析 —完遂を表す複合動詞「～きる」 「～ぬく」「～とおす」の場合—
	欧 文	A Visual Schematic Approach to the Motivation for Semantic Extension: The Case of Complex Predicates Meaning Accomplishment <i>-kiru, -nuku, and -toosu</i>

研究科	青山学院大学大学院 国際政治経済学研究科
専 攻	国際コミュニケーション専攻

氏 名	栗田 奈美
-----	-------

1. はじめに

本研究の出発点は、1)「～きる」「～ぬく」「～とおす」がなぜ「完遂」を表すのか、また、2) これら3つの類義表現はどのように使い分けられているのかという日本語学習者の問いに答えようとするところにあった。1)の問いは、「切る」「抜く」「通す」という本動詞の持つ空間義が、どのようなプロセスを経て完遂義へと拡張したのかという動詞の多義性に関わる問題である。そして、2)の問いは、我々人間がある事態をどのように把握し、その把握の仕方にふさわしい言語表現をどのように主体的に選択しているのかという人間の認知能力に関わる問題である。これらの問いに対する答えを求めるにあたり、本研究が採用した理論的枠組みは、認知言語学のアプローチであった。このアプローチにおいては、言語能力は一般的な認知能力によって動機づけられ、それを反映したものとして位置づけられる。表面的には現れにくい空間義と完遂義との有契性を見出すと同時に、人間による表現選択の動機づけまでを明らかにするには、こうしたアプローチが最もふさわしいと考えたためである。

これらの問いに対し、本研究では認知言語学的立場から、それぞれ、1) 後項動詞の意味は、本動詞の意味に動機づけられている、2) 類義表現である3者の使い分けは、本動詞の意味（特に百科事典的意味）的特徴の違い、つまり事態把握の仕方の違いに基づいているという仮説を提示し、その検証を行った。本研究が「完遂」を表す複合動詞を例に、最終的に明らかにすることを目指した課題は、「ある事象の言語化に際し、我々人間がその事象をどのように把握し、どのような動機づけによって1つの表現を選択しているのか」ということである。次節では、その分析結果の要旨を論文の章ごとに述べる。

2. 分析結果要旨

2.1. 複合動詞研究の概観

まず、第1章「複合動詞研究の概観」では、体系的研究と意味的研究に分け、主要な先行研究を検証した。体系的研究では、アスペクトの観点から見た複合動詞や、語彙的複合動詞と統語的複合動詞との区別等、今後の議論に必要な分類や術語を確認した。「完遂」を表す複合動詞の意味的研究としては、本研究が対象とする3つの複合動詞を詳細に観察し、その特徴や振る舞いを記述した姫野（1999）、森田（1989）を中心に挙げた。これらの先行研究に欠けており、最大の課題として残されていたのが、本動詞から後項動詞への意味拡張の

プロセスをつぶさに追い、その動機づけを明らかにすることであった。具体的には、1) 空間領域から時間領域への拡張の動機づけと、2) 「完遂」というプラスの評価性を持つに至った動機づけ、さらに、3) 3者の使い分けの動機づけである。また、検証方法としては今井(1993)の「～出す」の分析に注目した。今井はイメージ・スキーマを意味分析に取り入れることにより、本動詞から後項動詞への意味拡張の動機づけに妥当な説明を与えており、分析に図式を利用することの有効性も示すものであった。

2.2. 多義語研究の概観

第2章「多義語研究の概観」では、まず、艮山(1997 他)、瀬戸(1997a 他)の先行研究に基づき、メタファー、メトニミー等、意味拡張の認知的プロセスの内容を確認し、次に、多義語のプロトタイプの意味とスキーマの意味を比較対照した。その結果、この2つの意味の統合が有益であることが示唆されたが、一方で、統合には困難が伴うことも判明した。そして、イメージ・スキーマの定義を示した上で、このようなイメージ的(imagistic)記述法を多義語分析に取り入れた試みを、プロトタイプの意味から放射状に広がるそれぞれの拡張に注目した複数図式論と、スキーマの意味に注目した共通図式論に分けて整理した。

これらの図式の中で、本研究が応用したいと考えたのが国広(1994)の現象素であった。現象素は動詞のプロセス全体をフレーム(背景知識)として提示でき、そのプロセスを部分的に焦点化することで、メトニミー拡張した意味も表せるためである。さらに、イメージ・スキーマとは異なるものの、現象素もイメージ的記述を採用しているために、不変性仮説(Lakoff 1990)が適用できた場合には、メタファー拡張した意味のスキーマも包含できる可能性があった。但し、大半の現象素図には時間的なプロセスが記述されておらず、焦点化を受ける部分も明示されていないため、本研究ではその点を修正することにした。また、特に、異なる概念領域へと拡張するメタファーの意味については、図式を提示するだけでは十分に説明したことにならないため、スキーマの抽出と並行してプロトタイプの意味からの拡張も1つひとつ追うことにした。そうすることで、スキーマの意味とプロトタイプの意味の両者を考慮した多義語の新たな記述法の提案を目指した。

2.3. 本動詞のスキーマとその意味

第3章「本動詞のスキーマとその意味」では、まず、本研究における動詞分類法を提示した上で、3種の動詞の特徴と位置づけを検討した。その結果、使役動詞「切る」と、ヲ格が<起点>を表し、有界的経路を持つ使役移動動詞「抜く」には明確な *telicity* が見られたが、ヲ格が<中間経路>を表し、非有界的経路を持つ使役移動動詞「通す」については、使役行為（働きかけ）の完結を *telic* と見るか、移動の完結を *telic* と見るかにより、*telicity* の判断に違いが現れることがわかった。そして、ヲ格が<対象>を標示する場合には使役行為を、<経路>を標示する場合には移動を焦点化していると考えらることで、前者の場合は「通す」の表す事象が *telic*、後者の場合は *atelic* となる可能性があることを指摘した。

次に、「使役のスキーマ」を始めとする Langacker (1991) のスキーマを踏まえ、3つの本動詞の「視覚スキーマ」を提示した。「視覚スキーマ」とは、写真のようにある事象をそのまま写し取るのではなく、その事象の概略をイメージ的に記述した図式を指すが、Johnson (1987) のイメージ・スキーマほど高次に抽象化したものではない。そして、このスキーマを参照しながら、3種の動詞の意味分析を行った。ここでは、ベースとなる無色の視覚スキーマ（フレーム）によって動詞のスキーマ的意味を表し、その上に部分的にプロファイルを施した、複数の下位スキーマによって、大まかな意味カテゴリーに分類した。

まず、「切る」が表す事象のプロセス全般を表す視覚スキーマ（フレーム）に、部分的にプロファイルを施した下位スキーマとしては、切断された複数部分が等しく焦点化を受ける「切り分けスキーマ」、切り取られたり切り落とされたりする特定部分が焦点化を受ける「切り取りスキーマ」、不要な部分（この部分は焦点化されない）を切り捨て、新たな統合体として限定し、再創造する「切り捨てスキーマ」の3種を提示した。このうち、完遂義を動機づけていると推察されるスキーマは「切り捨てスキーマ」であった。

次に、「抜く」が表す事象のプロセス全般を表す視覚スキーマ（フレーム）の下位スキーマとしては、ヲ格が<対象>を標示する「対象スキーマ」と<経路>を標示する「経路スキーマ」の2種を提示した。このうち、完遂義を動機づけていると思われるスキーマは「経路スキーマ」であった。

最後に、「通す」が表す事象のプロセス全般を表す視覚スキーマ（フレーム）の下位スキーマとしては、「抜く」と同様に、ヲ格が<対象>を標示する「対象スキーマ」と<経路>を標示する「経路スキーマ」の2種を提示した。このうち、「通す」の完遂義を動機づけていると思われるスキーマは、<対象>（使役行為）ではなく<経路>（移動）を焦点化する「経路スキーマ」であった。

「切る」の「切り捨てスキーマ」、「抜く」の「経路スキーマ」、「通す」の「経

路スキーマ」は以下に示す通りである。

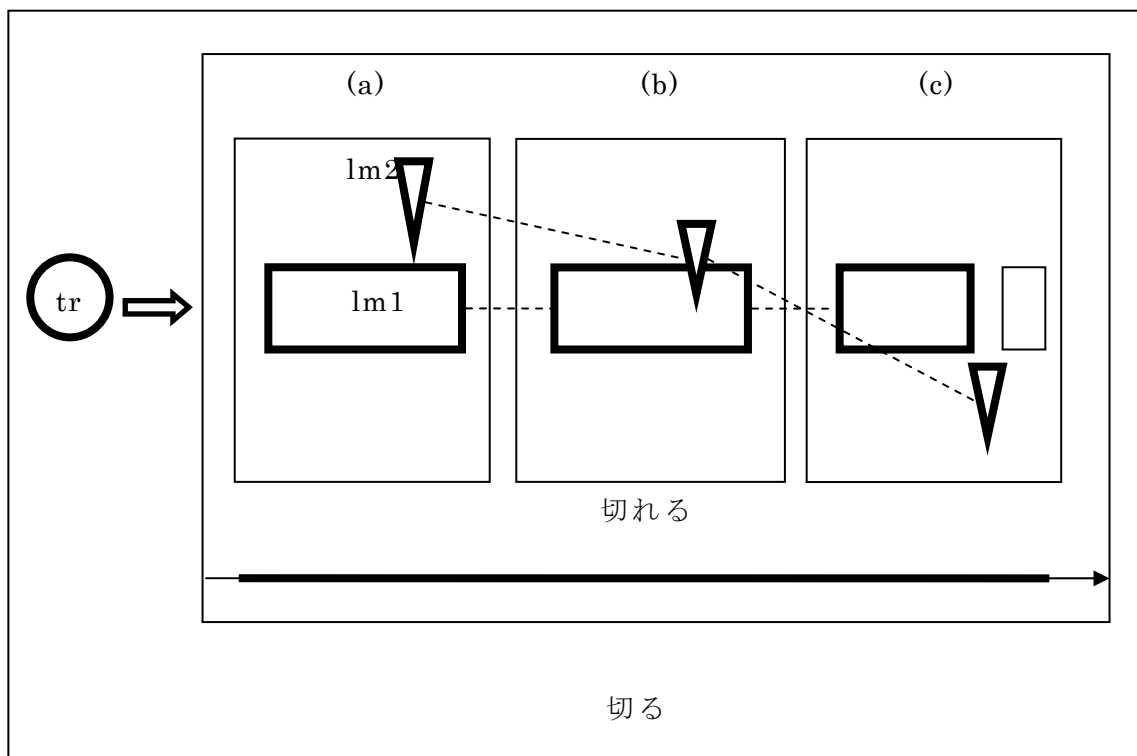


図 1. 「切る」の「切り捨てスキーマ」

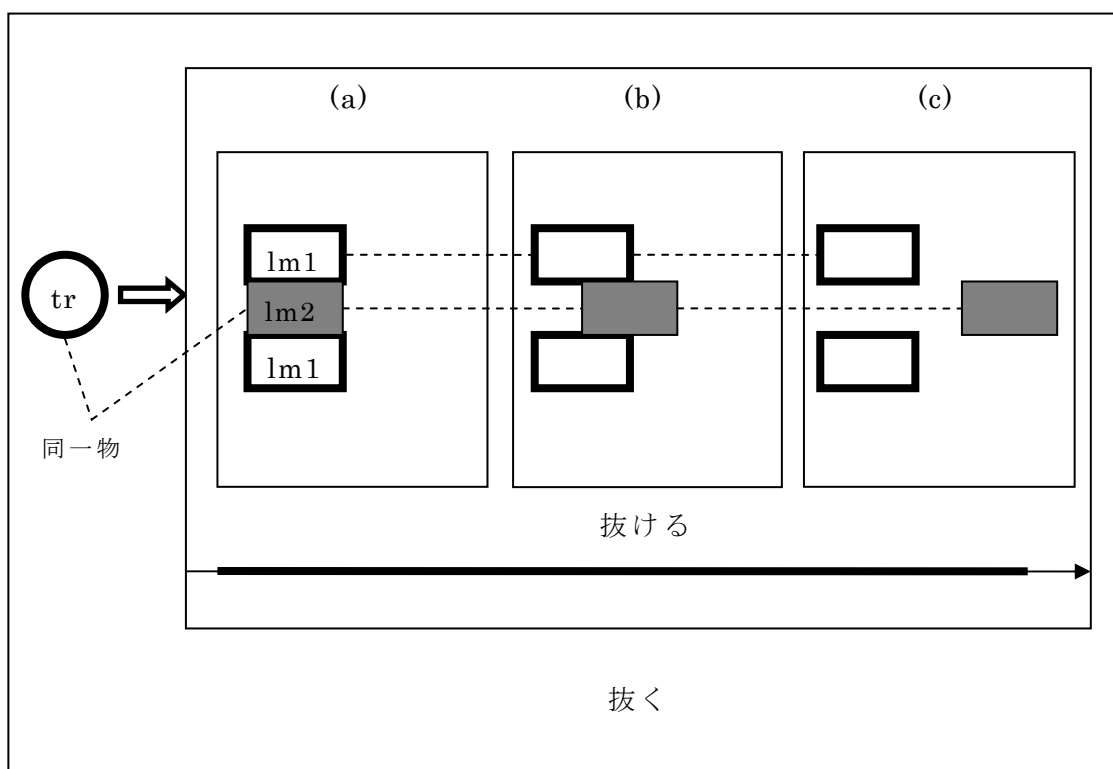


図 2. 「抜く」の「経路スキーマ」

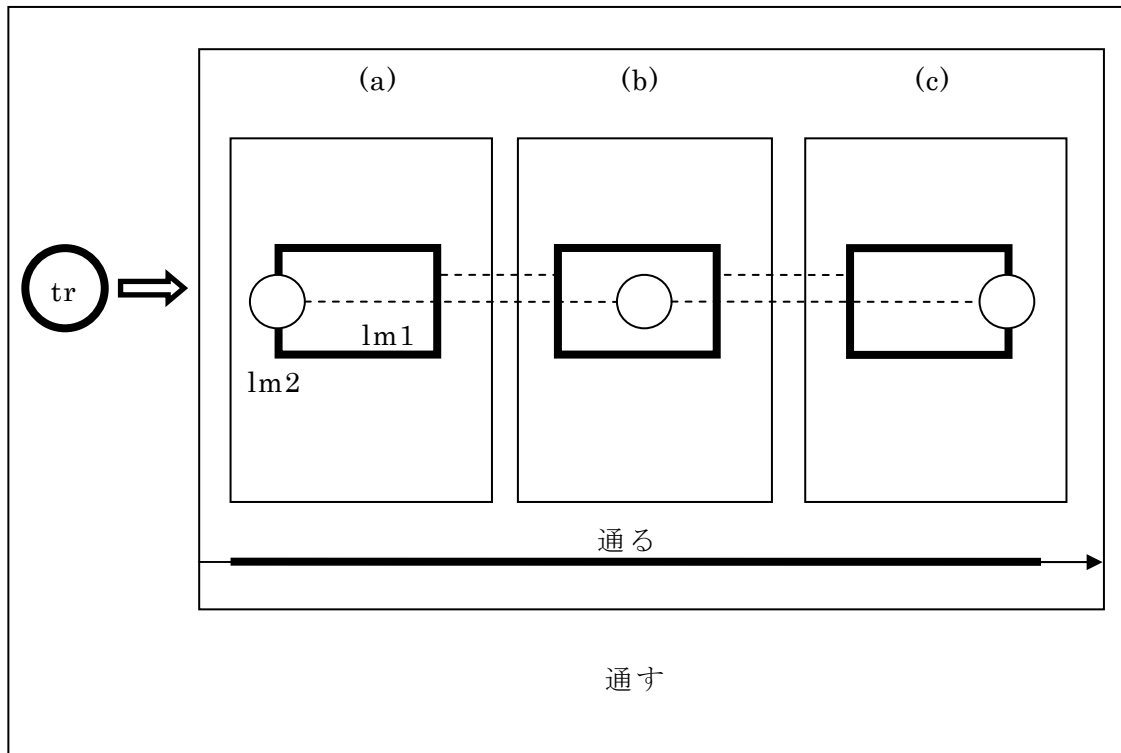


図 3. 「通す」の「経路スキーマ」

いずれも＜動作主＞が、参与者間の関係において最も際立ちの高い部分構造を指す **trajector** (tr) となっており、＜対象＞、＜経路＞、＜道具＞が 2 番目に際立ちの高い **primary landmark** (lm1) や 3 番目に際立ちの高い **secondary landmark** (lm2) となっている。図 1 は「太郎が爪切りで爪を切る」、図 2 は「矢が的を抜く」、図 3 は「見張りが門を（*太郎を）通す」といった事象をスキーマ的に表している。

一番外側の四角は「切る」「抜く」「通す」という使役事象が概念化される範囲全体（最大スコープ **maximal scope**）（Langacker 2008：63）を示し、二番目の四角は、ある言語表現の理解に直接関係している範囲を限る直接スコープ（**immediate scope**）（同）として状態・位置変化（この場合は「切れる」「抜ける」「通る」という自動詞で表される物理的事象）を示している。一番内側の 3 つの四角は、状態・位置変化が起こるプロセスを時間軸に沿って段階的に表しており、それぞれの四角内の lm1 と lm2 が点線で結ばれているのは、それらが同一物であることを示している。そして、その時間の経過は図の下方にある矢印によって表されており、矢印のうち、太い実線で表されている部分は、プロフィールを受けている時間である。そして、エネルギー（図の左方の白抜き矢印）が＜動作主＞から＜対象＞に移行することで、「切る」「抜く」「通す」という他動詞で表される使役事象が生起する。なお、プロセス自体は連続する

ものであるが、便宜上、(a)(b)(c)という記号でその段階を表している。

視覚スキーマによって動詞のスキーマ的意味を記述すると同時に、プロトタイプ的意味に関しては、靱山（1993, 1995）、瀬戸（2007）の手法に倣い、中心義を認定した上で、そこから完遂義を含む個別義への拡張を辿り、多義ネットワークとしてまとめ上げた。3種の動詞の意味および意味ネットワークに関する考察結果をまとめたものが、以下の図表である。「切る」「抜く」「通す」の順に示す。

スキーマ	個別義			リンク	対象(例)
切り分け	0 切断義① 複数部分への分割	一続きになっている物を、刃物などで、部分に分ける。切り分ける。		中心義	糸／布地／肉
		a	一続きになっている物事を、途切れさせる。中断させる。	メタ (◀0) ¹	トランプ／言葉
		b	空間的に連続しているものを、勢いよく押し分けて進む。	メタ (◀0)	空／波
			1 進行方向を変えたり、回転を与えたりする。	メト (◀0-b)	ハンドル／球
			2 際立つような動作をする。	メタ (◀0-b)	啖呵
		c	数値が基準を下回る。	メタ・メト (◀0)	原価
	1 殺傷義	身体を、刃物などで、傷つける。		メト (◀0)	額／罪人
		a	隠されていた内部を明らかにして、鋭く批判する。	メタ・メト (◀1)	世相
	2 開封義	容器を開封する。		メト (◀0)	封
		a	まっさきに物事をする。始める。	メタ・メト (◀2)	先頭
切り取り	3 切断義② 特定部分の分離	一続きになっている物の本体から、刃物などで、特定部分を離す。切り取る。		メト (◀0)	パンの耳／花
		a	物に付着した余分な水分を、振るなどして、取り去る。	メタ (◀3)	水気
		b	不要な人員や部門などを、整理する。	メタ (◀3)	社員

¹ 語義 0-a が中心義（語義 0）からメタファー拡張によって生じた意味であることを表す。なお、「メト」はメトニミーの略で、「メタ・メト」はメタファーとメトニミーの両者が機能していることを表す。

		c	発行したり、認証を与えたりする。	メト (◀3)	伝票
切り捨て	4		一続きになっている物の本体から、刃物などで不要部分を離して捨て、全体を整える。	メト (◀0)	爪
	切断義③ 切断により全体を整える	a	一続きになっている物事を、断絶、終結させる。	メタ (◀4)	縁／断ち-
		b	一続きになっている物事を限定し、区切りをつける。	メタ (◀4)	期限
		c	物事の程度が極度の状態に至ったり、継続する行為を完遂したりする。	メタ (◀4)	疲れ-／使い-
	5 創造義		一続きになっている物を分断したり、切り込みを入れたりすることで、新たな物を作り出す。	メト (◀0)	型紙／囲炉裏

表 1. 「切る」の意味

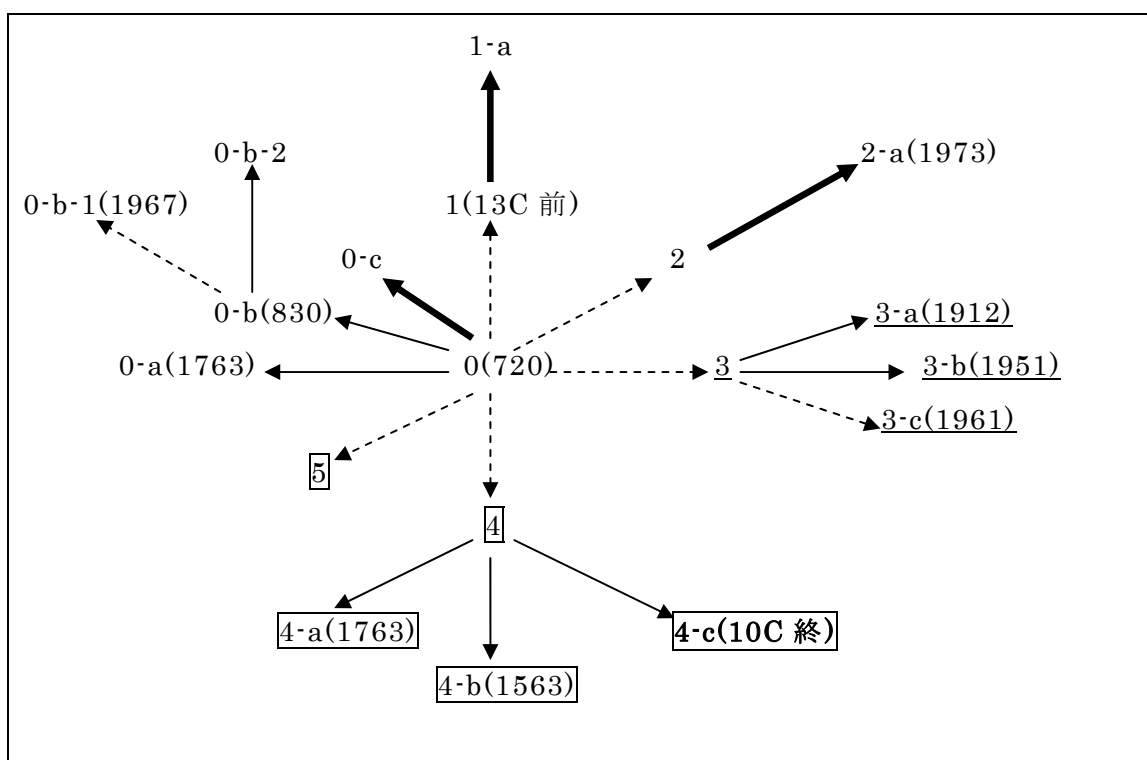


図 4. 「切る」の意味ネットワーク

上記の図中の括弧内の数字は、『日本国語大辞典』²に基づき、文献上、初めてその用法が現れた年あるいは年代を示している。図の矢印は拡張プロセスを

² 『日本国語大辞典 第2版』2000. 小学館.

表しており、実線の矢印はメタファー、点線の矢印はメトニミー、太い実線の矢印はメタファーとメトニミーの両者が機能していることを示している。また、記号を四角で囲ったものは「切り捨てスキーマ」、下線は「切り取りスキーマ」、それ以外は「切り分けスキーマ」によって表される語義であることを示している。なお、太字は複合動詞によって表される語義である。この図から、中心義 0（プロトタイプの意味）を中心に 2 次的成員、さらに 3 次的成員へと放射状に意味が拡張していることがわかる。また、同じスキーマで表される語義がクラスターを成していることも見て取れる。

スキーマ	個別義			リンク	対象・起点 (例)	
対象	0 抜去義	本体・容器から、その構成的一部分を、引っ張って分離させる。		中心義	歯／刀	
		a	本体・容器から、その構成的一部分を、外に出して除去する。		メト (◀0)	空気／水／力
			1	本来あるべき必要な構成的一部分を、欠いたり省いたりする。	メタ (◀0・a)	朝食／手
		b	本体・容器から、その構成的一部分を、選び取って獲得する。		メト (◀0)	カード／人材
			1	中に入っている金品を、ひそかに盗み取る。	メト (◀0・b)	財布
			2	新聞報道などで、特種をスクープする。	メタ (◀0・b)	特ダネ
	経路	1 貫通義	本体の一部分を突くことで分離させ、穴を開ける。		メト (◀0)	バケツの底 ----- 壁
a			抵抗のある場所を通過、突破し、向こう側に出る。		メタ (◀1)	的／三遊間
			1	感情・思考の程度が極度の状態に至ったり、困難な行為を貫徹したりする。	メタ (◀1・a)	悩み・／生き-
b		先、上位にあるものを追い越す。		メタ (◀1)	走者／競争相手	

表 2. 「抜く」の意味

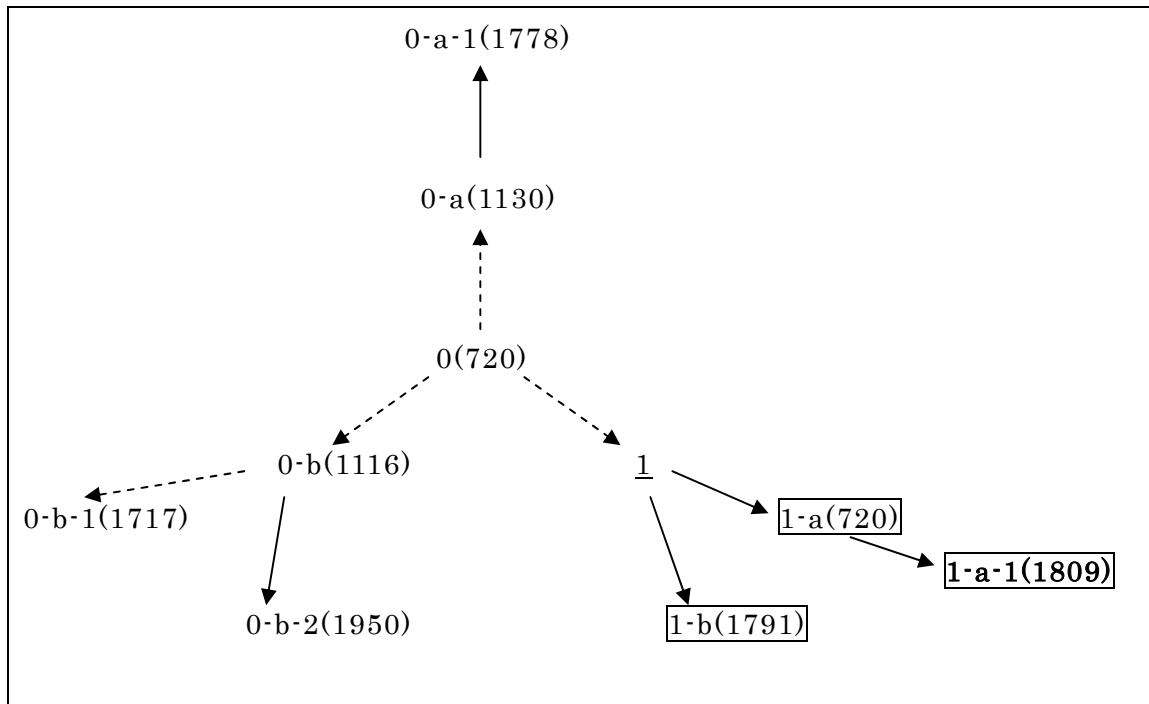


図 5. 「抜く」の意味ネットワーク

上記の図中の実線の矢印はメタファー、点線の矢印はメトニミーによる拡張を表している。また、記号を四角で囲ったものは「経路スキーマ」、下線は「経路スキーマ」と「対象スキーマ」、それ以外は「対象スキーマ」によって表される語義であることを示している。「抜く」も「切る」同様、中心義から放射状に意味が拡張し、同じスキーマで表される語義がクラスターを成していることがわかる。

スキーマ	個別義			リンク	対象・経路 (例)
対象 経路	0 通行・ 通過・ 貫通義	ある領域を経路・通過点として、物を移動（通行・通過・貫通）させる。		中心義	糸／火 ----- 茶こし
経路		a	ある領域に、経路を開通させる。	メト (◀0)	詰まった血管／鉄道
対象		b	伝えるべき情報を、しかるべき相手に伝達する。	メタ (◀0)	注文
		c	主張や希望などを、抵抗を排して強引に押し進め、受け入れさせる。	メタ (◀0)	無理／筋
対象 経路	1 通過	人や乗り物が、経路上のある地点を通過していくことを許容する。		メト (◀0)	車 ----- 門

対象	許容義	a	経路上のある地点を通過して、先の領域（屋内／室内）に人が到達することを許容する。	メト（◀1）	客
対象		b	会議や審査などの関門を通過させ、承認を与える。	メタ（◀1）	法案 ----- 国会
経路	2 透過義		物を隔てて、水・光・電気などを透過させる。	メタ（◀0）	電気 ----- カーテン
		a	人や物事を仲介にして、間接的に行う。	メタ（◀2）	窓口／書物
			ある期間にわたって、一定の状態を続ける。	メタ（◀0）	生涯
経路	3 継続義	a	ある期間またはいくつかの事柄にわたって、休まずにある行為を続ける。	メタ（◀3）	夜／全曲
		b	最後までずっとある行為・状態を続ける。	メタ（◀3）	走り-／泣き-

表 3. 「通す」の意味

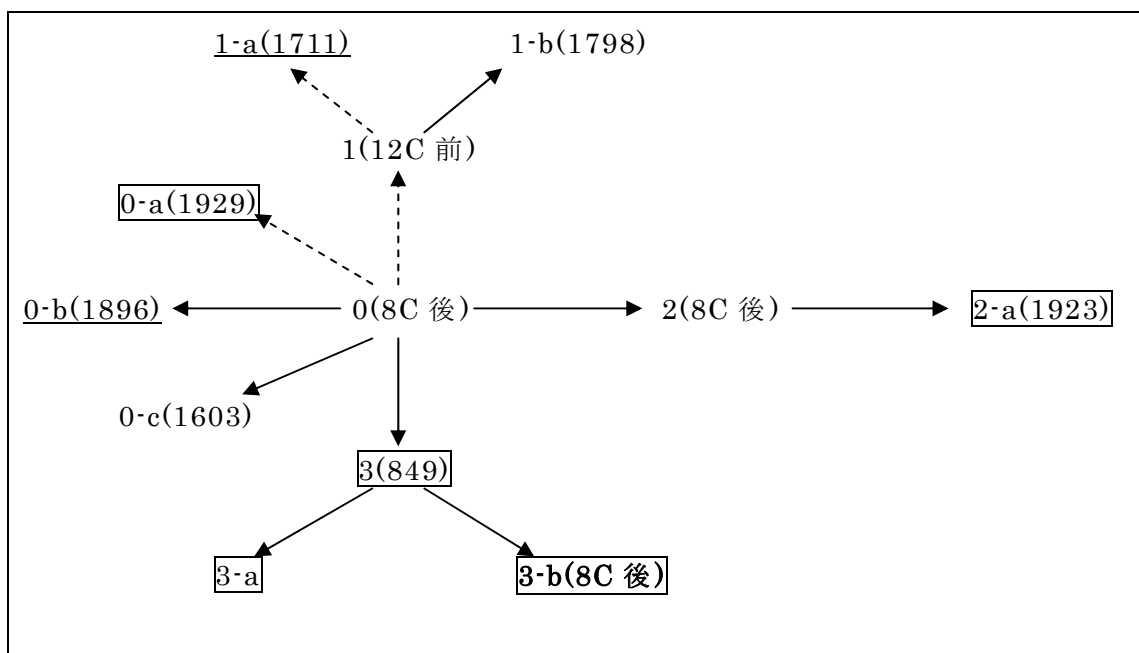


図 6. 「通す」の意味ネットワーク

上記の図中の実線の矢印はメタファー、点線の矢印はメトニミーによる拡張を表している。また、記号を四角で囲ったものは「経路スキーマ」、下線は「対象スキーマ」、それ以外は「経路スキーマ」と「対象スキーマ」の両者によって表される語義であることを示している。「切る」「抜く」同様、「通す」において

も中心義から放射状に意味が拡張している。スキーマについては、1つの語義を対象、経路のいずれのスキーマでも表せる場合が多く、明確なクラスターは形成されなかった。しかし、空間から時間へと拡張が進んだ継続義（語義 3, 3-a, 3-b）については、いずれの語義も「経路スキーマ」で表されていることがわかった。

以上のようなスキーマ的意味およびプロトタイプの意味の両者を考慮した分析の結果、3種の動詞は共通して「それまで一体化あるいは共在していたものが分離する」という事態を表していることがわかった。切断、抜去のみならず、貫通の場合も、その最終段階では<対象>が<経路>を離れるためである。この特徴が「ある継続事象の終結」や「ある継続事象からの離脱」へとメタファー拡張し、等しく完遂義を持つに至ったことを説明した。

一方、3種の複合動詞間の違いを動機づけていると思われる本動詞の意味的特徴も特定した。まず、「切る」は切断という telic な事象の最終段階（結果）を焦点化しており、鋭利な刃物でスパッと切断するイメージが勢いやスピード、瞬時性に写像されていた。次に、「抜く」は本体からその構成的一部分を完全分離させるまでのプロセスと結果を焦点化しており、telic な事象となっていた。もともと一体となっていたものを分離させるため、その使役移動に際しては摩擦や抵抗が存在し、事象達成に困難を伴うことが含意されていた。また、「経路スキーマ」によって表される貫通義においては、突破意識が強く働く傾向があることを示した。最後に、「経路スキーマ」によって表される「通す」は、使役事象でありながら<対象>がヲ格標示されず、経路内の一定した継続的移動（プロセス）が焦点化されるため、atelic となると同時に、他動性、動作主性が弱化する傾向があることを指摘した。

第3章では、後項動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」が表す完遂義を、それぞれ本動詞「切る」「抜く」「通す」からの拡張義の1つとして位置づけ、その拡張の道筋を明らかにした。この分析により、学習者の問い1)「～きる」「～ぬく」「～とおす」がなぜ「完遂」を表すのか、に対する仮説1) 後項動詞の意味は、本動詞の意味に動機づけられている、が理論的に証明された。

2.4. 後項動詞のスキーマとその意味

第4章「後項動詞のスキーマとその意味」では、まず、空間義から完遂義への拡張には<時間はモノである><時間の経過は移動である>等の時間に関するメタファーと、<変化／プロセス／活動は移動である><目的は終着点である>等の事象構造メタファーの、2種のメタファーが関与しているこ

とを示した。これらのメタファーにより、「完遂」を表す複合動詞に関する先行研究では明らかにされていなかった空間領域から時間領域への拡張の動機づけと、移動を表す「抜く」と「通す」が「完遂」というプラスの評価性を持つに至った動機づけを説明することができた。また、「切る」については、切断の結果、新たな統合体として再創造されるという「切り捨てスキーマ」によって表される意味からプラスの評価性を獲得したものと結論づけた。以上のように、空間義としての本動詞から完遂義としての後項動詞へと意味が拡張していると考えることが、妥当であることを説明した。

その上で、後項動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」の意味をスキーマとの関連から詳細に分析し、さらに、前項に挿入される動詞の種類や特徴にも注目しながら意味分類を行った。分析の結果、「～きる」は「極度の状態」と「行為の完遂」、「～ぬく」は「感情・思考の極度の状態」と「行為の貫徹」、「～とおす」は「行為・状態の一貫継続」と「行為の完遂」を表すことがわかった。但し、「～とおす」が表す「行為・状態の一貫継続」義のうち、メトニミー的に結果を焦点化したもののみが、telic な用法である「行為の完遂」義として解釈されるため、「行為の完遂」義は「行為・状態の一貫継続」義の下位分類（特殊例）として位置づけた。分析結果の概要は、以下の通りである。括弧内等に記載した動詞分類は、典型的な前項動詞の種類を表している。

「～きる」の意味

① 切断【他動詞／意志動詞】（例：耳を噛み切る）

② 行為の終結・断行【自・他動詞／意志動詞】

1) 「物理的切断」と「行為の終結・断行」の両義を持つもの【他動詞】

（例：鋼の糸・関係を断ち切る）

2) 「抽象的切断」と「行為の終結・断行」の両義を持つもの【自・他動詞】

（例：相手力士・A国を寄り切る／手・制止を振り切る）

3) 主に「行為の終結・断行」を表すもの【他動詞】（例：人を思い切る）

③ 極度の状態【自動詞／無意志動詞／継続的・瞬間的主体変化動詞／内的情態動詞】

1) 継続的主体変化の「極度の状態」を表すもの【継続的主体変化動詞／内的情態動詞】

・ 継続的主体変化動詞

自然現象(例:乾ききる／固まりきる／伸びきる／澄みきる／汚れきる)

生理的現象(例:治りきる／疲れきる／冷えきる／弱りきる／凍えきる)

・ 内的情態動詞

感情や精神の働き(例: 困りきる／苦りきる／人を信じきる／憎みきる)

2) 瞬間的主体変化の「極度の状態」を表すもの【瞬間的主体変化動詞／内的情態動詞】

(例: 死にきる／わかりきる／決まりきる／なりきる／つききる／かかりきる)

④ 行為の完遂【自・他動詞／意志動詞／継続的主体動作動詞】

1) 質的完遂(例: 役柄をみごとに演じきる／描ききる／守りきる)

2) 量的完遂(例: 道を渡りきる／10キロを走りきる／有り金を使いきる)

「～ぬく」の意味

① 抜去【他動詞／意志動詞】(例: 雑草を引き抜く／社員を引き抜く)

② 貫通【他動詞／意志動詞】(例: 床を踏み抜く／本質を見抜く／競争相手を追い抜く)

③ 感情・思考の極度の状態【自動詞／無意志動詞／内的情態動詞】

(例: 悩みぬく／苦しみぬく／困りぬく／弱りぬく／知りぬく)

④ 行為の貫徹【自・他動詞／意志動詞／内的情態動詞・継続的主体動作動詞】

1) 思考・感情を伴う意志的行為の貫徹

・内的情態動詞(例: 人を信じぬく／愛しぬく／憎みぬく／考えぬく)

2) 動作の貫徹

・継続的主体動作動詞(例: 10キロを走りぬく／苦境を生きぬく／仕事をやりぬく)

「～とおす」の意味

① 貫通【他動詞／意志動詞】(例: 針を刺し通す／将来を見通す)

② 行為・状態の一貫継続【自・他動詞／意志・無意志動詞】

1) 一定期間継続可能な行為【意志・無意志動詞】

・継続的主体動作動詞

意志動詞(例: 歩きとおす／本を読みとおす／寝とおす／頑張りとおす／約束を守りとおす)【自・他動詞】

無意志動詞(例: 泣きとおす／震えとおす／雨が降りとおす／天気が荒れとおす)【自動詞】

・内的情態動詞(例: 怯えとおす／悩みとおす／人を信じとおす)【自・他動詞】

2) 残存する結果が、状態として一定期間継続可能な行為【意志動詞】

・瞬間的主体変化動詞(例: 立ちとおす／乗りとおす／黙りとおす)【自

動詞]

- ・継続的主体動作・主体変化動詞（例：ブーツを履きとおす／着とおす）

[他動詞]

- ・継続的主体動作・客体変化動詞（例：頭を下げとおす／秘密を隠しとおす）[他動詞]

3) 反復により、一定期間継続可能な行為 [自・他動詞／意志動詞]

- ・継続的主体動作動詞（例：通いとおす／言いとおす）

②' 行為の完遂 [自・他動詞／意志動詞]

1) 一定期間継続可能な行為 [意志動詞]

- ・継続的主体動作動詞

意志動詞（例：10キロを走りとおす／最後までやりとおす／源氏物語を読みとおす）[自・他動詞]

- ・内的情態動詞（例：死ぬまで人を信じとおす）[他動詞]

2) 反復により、一定期間継続可能な行為 [自・他動詞／意志動詞]

- ・継続的主体動作動詞（例：6年間通いとおす）

第4章では、前章で述べた本動詞の意味的特徴が後項動詞にも継承されていることを確認した。そして、その特徴が、後項動詞が表すことのできる意味範囲を規定していることを指摘した。具体的には、①本動詞が結果を焦点化し、telicとなる「～きる」と「～ぬく」のみが「極度の状態」を表す、②本動詞が「経路スキーマ」によって表される意味の場合には、プロセスを焦点化するため atelic となり、他動性、動作主性が弱化する「～とおす」のみが「行為・状態の一貫継続」を表す、③本動詞が表す事象成立に際し、プロセスにおける困難克服の含意を持つ「～ぬく」は、無意志性の前項動詞に後接して「極度の状態」を表すことはない、といったことである。このように、結果の焦点化は telicity に、プロセスの焦点化は継続性および意志性に反映されることを指摘した。姫野（1999）にも時間性、意志性という観点からの3者の比較は見られたが、本研究では時間性を telicity と継続性という2点から捉え直すことで、より精緻な分析を可能にした。また、本動詞が持つフレーム的知識が後項動詞に継承されていることも明らかにした。このような本動詞と後項動詞との関連性やフレーム的知識の継承は、本動詞と後項動詞がスキーマを共有していることに由来すると同時に、それぞれのスキーマが持つ特徴の違いにより、3者の意味範囲や使い分けが動機づけられていると結論づけた。この分析により、先行研究で明らかにされていなかった3者の使い分けの動機づけが示され、さらに、学習者の問い2) これら3つの類義表現はどのように使い分けられている

のか、に対する仮説 2) 類義表現である 3 者の使い分けは、本動詞の意味（特に百科事典的意味）的特徴の違い、つまり事態把握の違いに基づいている、が理論的に証明された。

2.5. コーパスに見る「～きる」「～ぬく」「～とおす」

第 5 章「コーパスに見る『～きる』『～ぬく』『～とおす』」では、第 3 章および第 4 章で理論的に証明した 2 つの仮説の妥当性を裏づける支持的証拠を求め、コーパス調査を行った。コーパスには「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」を使用し、1) 3 者の使用状況、2) 共起しやすい副詞、3) 言い換え可能な類義表現の比較、4) 複数の後項動詞が結合する可能性について調査した。その結果、最終段階を焦点化する「～きる」、意志的に困難を克服することで、ある状況を離脱する「～ぬく」、動作主体の積極的な関与より、ある状況の継続に価値を見出す「～とおす」といった 3 者それぞれの特徴およびその特徴に基づく使い分けが、実際のデータの中に確認された。このことにより、前章までの考察結果の妥当性が裏づけられ、コーパスによる調査結果を支持的証拠として提示することができた。

第 3 章から第 5 章までの分析結果に基づき、「～きる」「～ぬく」「～とおす」の意味的特徴をまとめたものが以下の表である。

	～きる	～ぬく	～とおす
本動詞の 基本的意味	切断	抜去 貫通（突破）	経路内の移動 （通行・通過・貫通） の強制・許容
移動経路の 有界性		有界的 （場所目的語 ＝起点）	非有界的 （場所目的語 ＝中間経路）
完遂義を動機 づけるスキーマ	切り捨てスキーマ	経路スキーマ	経路スキーマ
スキーマ上の 焦点化部分	結果 （最終段階）	プロセス＋結果 （継続状態からの 離脱）	プロセス （一定した 継続状態）
フレーム的知識	瞬時性の存在	抵抗・困難さの 克服	他動性・ 動作主性の弱化
後項動詞の意味	①極度の状態 ②行為の完遂	①感情・思考の 極度の状態 ②行為の貫徹	①行為・状態の 一貫継続 （①' 行為の完遂）
後項動詞が持つ 顕著な特徴	完結性（telicity） 瞬時性	意志性	継続性・状態性

表 4. 「～きる」「～ぬく」「～とおす」の意味的特徴のまとめ

まず、telic な使役動詞「切る」の拡張義としての後項動詞「～きる」は、結果（最終段階）を焦点化し、明確な telicity と瞬時性を持つために「行為の完遂」のみならず「極度の状態」の意も表すことができた。次に、telic な使役移動動詞「抜く」の拡張義である「～ぬく」は、困難を伴う継続状態からの離脱を表し、プロセスと結果の両者を焦点化していた。そのため、極度の状態のうち、程度の進行の過程で何らかの抵抗が含意される「感情・思考の極度の状態」のみを表すと同時に、完遂義としては意志性の強い「行為の貫徹」を表していた。最後に、「経路スキーマ」によって表された場合の atelic な使役移動動詞「通す」の拡張義「～とおす」は、一定した継続状態、つまりプロセスのみを焦点化していた。そのため、3者の中で唯一、目的（着点）を持たない無意志動詞が表す行為や atelic な行為、さらには変化の結果状態の継続までも表すことができ、他動性、動作主性の弱化が見られた。そして、「行為・状態の一貫継続」の結果がメトニミー的に焦点化された場合のみ、「行為の完遂」を表すことが可

能であった。これら 3 者の特徴を一言で表すと、「～きる」は完結性 (telicity) および瞬時性、「～ぬく」は意志性、「～とおす」は継続性および状態性となる。

このような個々の特徴の相違に基づく 3 者の使い分け、住み分けを整理したものが以下の表である。

後項動詞が表す意味と文法形式		～きる	～ぬく	～とおす
極度の状態	自然現象／生理現象 (例：澄む)	○	*	*
	感情や精神の働き (例：困る)	○	○	#
	語彙化したもの (例：死ぬ)	○	*	*
行為・状態の一貫継続	無意志行為の一貫継続 (例：泣く)		*	○
	atelic な行為の一貫継続 (例：寝る)		*	○
	結果状態	瞬間的主体変化動詞 (例：立つ)		○
		主体動作・主体変化動詞 (例：履く)		○
		主体動作・客体変化動詞 (例：下げる)		○
行為の完遂／貫徹	行為の質を問わない量的完遂 (例：上る)		*	*
	感情・思考を伴う意志的行為の完遂／貫徹 (例：憎む)		○	○
	行為 (動作) の完遂／貫徹 (例：走る)		○	○
文法形式	名詞形 (例：働く)		*	○
	重複構文 (例：考える／走る)		○	*
	進行形 (例：守る)		?	○
	～てくる／～ていく (例：走る／信じる)		○	○

表 5. 「～きる」「～ぬく」「～とおす」の役割分担

ここでは、結果のみを焦点化する「～きる」が「極度の状態」のすべての意味を、プロセスのみを焦点化する「～とおす」が「行為・状態の一貫継続」のすべての意味を表すことができる点と、意志性の強い「～ぬく」のみが強調を表す重複構文中に現れる点を指摘した。また、「行為の完遂／貫徹」は「行為の質を問わない量的完遂」を除き、概ね 3 者とも表すことが可能であったが、「1 時

間」「1時間で」「造作なく」といった副詞句を挿入するテストにより、意味的な守備範囲に違いがあることを説明した。

以上のことから、「～きる」が瞬時的な最終段階（結果）を焦点化し、「～ぬく」が困難を伴うプロセスを経てそこから離脱するまでを焦点化し、「～とおす」が一定期間継続するプロセスを焦点化するという3者の特徴づけが妥当なものであることを示した。また、言い換え可能な類義表現となっている場合にも、3者にはそれぞれ得意分野があるため、その中からある事象を表すのに最もふさわしい表現形式を認知主体が選択し、言語化しているものと結論づけた。

2.6. 日本語教育への応用

第6章「日本語教育への応用」では、前章までに積み上げてきた認知言語学的視点からの知見を、日本語教育の現場に生かしていく可能性および具体的な方法について論じた。まず、帰納的、ボトムアップ的なアプローチにより、学習者に気づきを与えることの有用性を述べた上で、教育への具体的な応用方法を検討した。複合動詞導入の段階ではプロトタイプの用例を複数提示し、帰納的な意味理解を促すが、本研究では以下のような特徴を持つものをプロトタイプと規定した。

「～きる」

進行する程度や継続行為の、瞬時的な最終段階（結果）を焦点化したもの

「～ぬく」

進行する感情・思考の程度や継続行為のプロセスに、何らかの障害や困難が存在するが、それを克服し、最終段階でその状態から離脱するところまでを焦点化したもの

「～とおす」

ある状態（結果状態）や行為が、途切れることなく、一定不変に継続するプロセスを焦点化したもの

このような特徴を持つ用例の導入、練習後に、本動詞の意味との関連性に対する気づきを促し、類義表現の比較の段階では、プロトタイプの用例を比較対照した上で、それぞれの使用可能範囲を明確にしていく。その際、必要に応じて視覚スキーマも提示する。このような方法をとることで、効果的な導入および使い分けを理解した定着が期待できることを指摘した。

以上、各章の分析結果の要旨を述べてきたが、次節では本研究の評価と今後

の展望について述べる。

3. 本研究の評価と今後の課題

本研究の意義は、以下の3点に集約できる。まず1点目は、多義語の新たな記述法の提案である。本研究では、語の表す全過程をフレームとして提示し、その上に部分的にプロファイルを施した下位スキーマを複数設定することで、メトニミー的意味を記述した。さらに、スキーマの背景化は進んでいたものの、同一のスキーマによってメタファー的意味も記述可能であることを示した。例えば、「切る」における「一続きになっている物」が「～きる」の「状態変化が進行する程度のスケール」に写像され、「通す」における「経路」が「～とおす」の「期間」に写像されていたように、本動詞の意味からメタファー拡張した後項動詞の意味の説明にも、本動詞と同一のスキーマを使用することができた。Lakoff (1990) の不変性仮説により、根源領域から目標領域へのメタファーの写像を経ても、イメージ・スキーマ構造は維持されることが明らかになっている。本研究が採用した視覚スキーマは、イメージ・スキーマより原初的で実際の運動に近い、下位レベルのスキーマであったが、この場合にも不変性仮説が機能していたと言えよう。但し、スキーマが同一であることを示すだけでは、物理的意味とメタファー的意味の違いは表せない。そこで、本研究では、スキーマによって共通性を示しながら、並行してプロトタイプの意味からの拡張を記述するという2段構えの手法を取った。先行研究が試みていたようにスキーマ的意味とプロトタイプの意味の統合を目指すのではなく、両者を並立させ、相互に補う形で語の意味全体を記述しようとした点に、本研究の独自性があると言える。

2点目は、新たな視点からの複合動詞分析である。本研究では、日本語学習者の問いに対する答えとなる、1) 後項動詞の意味は、本動詞の意味に動機づけられている、2) 類義表現である3者の使い分けは、本動詞の意味（特に百科事典的意味）的特徴の違い、つまり事態把握の違いに基づいている、という2つの仮説を証明した。このような「動機づけ」という視点は、従来の複合動詞研究が十分に持ち得ずにいたもので、意味的特徴や類義表現の使い分けに関する優れた指摘を残しながらも、学習者の立場から見ると、結局は言語事実として1つひとつ覚えていかなければならない「約束事の集合」(田中 2007) (例：切断を表す「切る」は「完遂」を表すことができる／「乾ききる」とは言えるが「乾きぬく」「乾きとおす」とは言えない) となっていた。本研究は、意味拡張や使い分けの動機づけを、本動詞およびそのスキーマが示す意味的特徴から

明らかにした点で、一定の貢献ができたものと思われる。

3点目は、我々人間の事態把握と言語表現選択との関係の一端を示した点である。本研究の最上位の課題は、「完遂」を表す複合動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」を例に、ある事象の言語化に際し、我々人間がその事象をどのように把握し、どのような動機づけによって1つの表現を選択しているのかを検証するというものであった。そして、前節で述べた本研究の分析結果は、客観的には同一に見える完遂事象であっても、それを把握する認知主体が、最終的な達成段階に注目するのか、最後まで一貫して継続したことに注目するのか、あるいはその過程に困難が存在し、それを克服したことに注目するのかといった違いにより、最もふさわしい表現を主体的に選択しているということを示していた。

本研究は、語の意味拡張や表現選択に際しての慣習化（恣意性）を否定するものではないが、ある語が元の意味とは異なる意味（例：完遂）を持つようになったり、ある事態を表すのに複数ある表現のうちから1つを選択したりすることが、偶発的に起こるとは考えにくい。本研究の分析結果は、それらの間に動機づけを認めようとする認知言語学の主張が妥当であることを示すものである。そのように考えることで、「切る」「抜く」「通す」が完遂義を持つことや、我々が複数ある類義表現の中から1つを選んで使用していること等の、現に眼前に示されている言語事実やその使用状況に対する、より適切な説明が与えられたものと考えられる。この説明は、日本語母語話者の言語使用にとっては取り立てて必要のないものであるかもしれない。しかし、日本語学習者にとっては、語の意味および用法を十分に理解し、使用語彙とするための重要な情報となるのは間違いない。

しかしながら、今回の分析は「完遂」を表す複合動詞に限定したものであるため、引き続き検討すべき点も多い。今後の課題として、以下に4点を挙げる。まず、多義語の記述法については、他の品詞の記述にいかに対応できるかという問題がある。本研究は動詞が対象であったため、その全過程を視覚スキーマによって表すことが可能であった。英語の前置詞の意味分析にも図式が多用されているため、動詞に限らず、ある程度の空間性や動性を持つ品詞であれば、このスキーマによる記述が可能であると思われるが、名詞や形容詞等、状態性の品詞については、スキーマ的意味の記述法を別途検討する必要がある。

2点目として、今回の分析と同様の結果が、他の統語的複合動詞を研究対象とした場合にも得られるかどうか、検証を続ける必要がある。但し、瀬戸(1995)は、後項動詞はすべて空間表現であり、常に空間のメタファーとして使用される可能性を秘めていると述べている。したがって、他の後項動詞も「～きる」

「～ぬく」「～とおす」同様、空間義からのメタファー拡張として分析できる可能性は高いものと思われる。

また、本研究は統語的複合動詞の後項を対象としたが、動機づけという観点から見ると、分析可能性の低い語彙的複合動詞（例：取り組む／盛り込む／踏み切る）も同様の分析が可能となるものと思われる。統語的複合動詞の後項と同様、これらの動詞も類推が効きにくく、学習者にとっては習得困難な項目であるため、動機づけに関する分析が強く望まれる。これが3点目の課題である。

最後に、何より最大の課題は、本研究による知見を単なる知識で終わらせることなく、日本語教材としてクラス活動で活用可能な形に加工していくことである。前章の「日本語教育への応用」で示した提案を具体化し、視覚スキーマを教材化することで、研究の種を与えてくれた日本語学習者に還元すると同時に、学習者の認知能力を活用した新たな日本語教授法を構築していきたいと考える。

主要参考文献

- 姫野昌子 1980. 「複合動詞「～きる」と「～ぬく」、「～とおす」」『日本語学校論集』7, 23-46.
- . 1999. 『複合動詞の構造と意味用法』東京：ひつじ書房.
- 池上嘉彦 1993. 「＜移動＞のスキーマと＜行為＞のスキーマー日本語の「ヲ格＋移動動詞」構造の類型論的考察」『外国語科研究紀要』41, 3, 34-53.
- . 2009. 『自然な日本語を教えるために 認知言語学をふまえて』東京：ひつじ書房.
- 今井忍 1993. 「複合動詞後項の多義性に対する認知意味論によるアプローチ－「～出す」の起動の意味を中心にして－」『言語学研究』12, 1-24.
- 石井正彦 1988. 「接辞化の一類型－複合動詞後項の補助動詞化－」『方言研究年報』30, 281-296.
- 影山太郎 1993. 『日本語研究叢書 文法と語形成』東京：ひつじ書房.
- . 2001. 『日英対照 動詞の意味と構文』東京：大修館書店.
- . 2010. 「動詞の意味と統語構造」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座 1 語・文と文法カテゴリーの意味』東京：ひつじ書房. pp.153-171.
- 河上誓作 1996. 『認知言語学の基礎』東京：研究社.
- 金田一春彦 1950. 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63. （1976. 金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』東京：麦書房. pp.5-26. に再録）

- 工藤真由美 1995.『アスペクト・テンス体系とテキスト』東京：ひつじ書房.
- 国広哲弥 1982.『意味論の方法』東京：大修館書店.
- . 1994.「認知的多義論－現象素の提唱－」『言語研究』106, 22-43.
- . 1997.『理想の国語辞典』東京：大修館書店.
- . 2006.『理想の国語辞典Ⅱ 日本語の多義動詞』東京：大修館書店.
- 栗田奈美. 2011.「日本語学習者に対する複合動詞の指導についての一提案－
「～きる」を例に」『立教大学異文化コミュニケーション学部紀要こと
ば・文化・コミュニケーション』3, 175-184.
- 松田文子 2004.『日本語複合動詞の習得研究－認知意味論による意味分析を
通して－』東京：ひつじ書房.
- 松本曜 1997.『日英語比較選書6 空間と移動の表現』中右実（編）東京：
研究社.
- . 2010.「多義性とカテゴリー構造」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座
1 語・文と文法カテゴリーの意味』東京：ひつじ書房. pp.23-43.
- 榎山洋介 1993.「多義語分析の方法－多義的別義の認定をめぐって－」『名古
屋大学日本語・日本文化論集』1, 35-57.
- . 1995.「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際－意味転
用の一方向性：空間から時間へ－」『東京大学言語学論集』14, 621-639.
- . 1997.「慣用句の体系的分類－隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意
味の成立を中心に－」『名古屋大学国語国文学』80, 29-43.
- . 2001.「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明（編）
『認知言語学論考 No.1, 2001』東京：ひつじ書房. pp.29-58.
- 森田良行 1989.『基礎日本語辞典』東京：角川書店.
- 森山新 2008.『シリーズ言語学と言語教育 16 認知言語学から見た日本語格
助詞の意味構造と習得－日本語教育に生かすために』東京：ひつじ書房.
- 鍋島弘治朗 2011.『日本語のメタファー』東京：くろしお出版.
- 佐藤信夫 1978.『レトリック感覚』東京：講談社.
- 瀬戸賢一 1995.『空間のレトリック』東京：海鳴社.
- . 1997a.「意味のレトリック」中右実（編）『日英語比較選書1 文
化と発想とレトリック』東京：研究社. pp.93-183.
- . 1997b.『認識のレトリック』東京：海鳴社.
- . 2007.『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館.
- 杉村泰 2008.「複合動詞「一切る」の意味について」『言語文化研究叢書7 日
本語の魅力』63-79.
- . 2012.「コーパスを利用した複合動詞「V1-通す」の意味分析」『言

- 語文化論集』 34, 1, 47-59.
- 鷲見幸美 1999. 「動詞「ぬく」の多義構造」『名古屋大学日本語・日本文化論集』 7, 1-40.
- . 2001. 「日本語使役移動動詞「とおす」の多義構造」『日本認知言語学会論文集』 1, 99-109.
- 田中茂範 1990. 『認知意味論－英語動詞の多義の構造』 東京：三友社出版.
- . 2007. 「認知的スタンスと英語教育」『日本認知言語学会論文集』 7, 552-563.
- 谷口一美 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 東京：ひつじ書房.
- 寺村秀夫 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 東京：くろしお出版.
- 辻幸夫 2002. 『認知言語学キーワード事典』 東京：研究社.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』 東京：ひつじ書房.
- . 2001. 「ことばの科学の認知言語学シナリオ」山梨正明（編）『認知言語学論考 No.1, 2001』 東京：ひつじ書房. pp.1-28.
- Bolinger, Dwight L. 1977. *Meaning and Form*. New York: Longman.
- Brugman, Claudia. 1981. *Story of Over*. M. A. thesis, University of California, Berkeley.
- Dowty, D. R. 1991. "Thematic proto-roles and argument selection." *Language* 67, 547-619.
- Evans, Vyvyan. 2010. *Language, cognition and space: The State of the Art and New Directions (Advances in Cognitive Linguistics)*. London: Equinox Publishing.
- Fillmore, Charles. 1982a. "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis." In R. J. Jarvella and W. Klein (eds.). *Speech, Place, and Action*. London: John Wiley. pp.31-59.
- . 1982b. "Frame Semantics." In The Linguistic Society of Korea (ed.). *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin Publishing. pp.111-138.
- Hopper Paul J., and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press. (日野資成（訳）2003. 『文法化』 福岡：九州大学出版会.)
- Johnson, Mark. 1987. *The Body In The Mind*. Chicago: The University of Chicago. (菅野盾樹・中村雅之（共訳）1991. 『心のなかの身体』 東京：

紀伊國屋書店.)

Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (共訳) 1986. 『レトリックと人生』東京：大修館書店.)

———. 1999. *Philosophy in the flesh: the embodied mind and its challenge to Western thought*. New York: Basic Books. (計見一雄 (訳) 2004. 『肉中の哲学－肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』神奈川：哲学書房.)

Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他 (訳) 1993. 『認知意味論』東京：紀伊國屋書店.)

———. 1990. “The invariance hypothesis: Is abstract reason based on image-schemas?” *Cognitive Linguistics* 1, 1, 39-74. (杉本孝司 (訳) 2000. 「不変性仮説－抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか？」坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房. pp1-59.

———. 1993. “The contemporary theory of metaphor.” In Andrew Ortony (ed.). *Metaphor and thought*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.202-251.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1, Stanford: Stanford University Press.

———. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2, Stanford: Stanford University Press.

———. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press. (山梨正明 (監訳) 2011. 『認知文法序説』東京：研究社.)

Lee, David. 2001. *Cognitive Linguistics An Introduction*. Victoria: Oxford University Press. (宮浦国江 (訳) 2006. 『実例で学ぶ認知言語学』東京：大修館書店.)

Taylor, John R. 1989. *Linguistic Categorization Prototypes in Linguistic Theory*. London: Oxford University Press. (辻幸夫・鍋島弘治朗・篠原俊吾・菅井三実 (訳) 2008. 『認知言語学のための14章＜第三版＞』東京：紀伊國屋書店.)

Tyler, Andrea, and Vyvyan Evans. 2003. *The semantics of English prepositions: spatial scenes, embodied meaning and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press. (国広哲弥 (監訳) 2005. 『英

語前置詞の意味論』東京：研究社.)

Van Valin, Robert D. Jr. and Randy J. Lapolla. 1997. *Syntax: Structure, Meaning and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.

Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. New York: Cornell University Press.